

## クレジット:

UTokyo Online Education 東京大学朝日講座 2020 納富 信留

## ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



朝日講座 不安の時代

2020年10月7日

西洋古代が抱えた不安

納富信留

(人文社会系研究科教授・哲学)

## 【1】「不安」とは何か：基本的な考察

(1) 本講座のイントロとして：「不安」の基礎考察

\* 不安はいつでもある：時代・状況を越えて

\* 不安とはどんなものを語り、何であるかを知ることが、解消につながる

(2) 「不安」という言葉

\* 日本語の「不安」：否定辞「不」を伴う語

例：不足、不満、不正、不可能、不意、不憫、不敵など

\* 英語

uneasiness

anxiety

worry

\* 言語でも違うニュアンス 分析が必要（哲学）

\* 辞典での意味（『スーパー大辞林』）

ふあん 【不安】（名・形動）文ナリ

① 気がかりなこと。心配なこと。これから起こる事態に対する恐れから、気持ちが落ち着かないこと。また、そのさま。「—がつのも」「—な一夜を過ごす」

② 〔哲〕〔ドイツ・*Angst*〕人間存在の根底にある虚無からくる危機的気分。原因や対象がわからない点で恐れと異なる。実存主義など現代哲学の主要概念。

③ 〔心〕漠とした恐れ of 感情。動悸（どうき）・発汗などの身体的徴候を伴うことが多い。

\* 熟語や慣用的な表現

「不安を抱く」「不安に襲われる」「不安な毎日」「言いようのない不安」

\* 反対語から考える：言葉の多義性

「安心」の反対：「あなたの健康が不安だ＝私はあなたの健康について不安だ」

「安全」の反対：「夜道は不安だ、新製品は不安だ」

「案内」の反対：「この土地は不安だ。～不案内」

「安寧・安定」の反対：「世界情勢は不安だ」

### (3) 「不安」の定義

\* 私たちの心の状態（情態）＋ なにかの状況との関わり

\* 「不安」は何に対してか

\* 「恐怖 fear」との違い 特定の対象への「恐れ」

例：「スズメバチが怖い」「独裁権力による弾圧への恐れ」

### (4) 「不安」と時間の問題

\* 現在の状況への不安：「不安を抱える、不安に怯える」

\* 将来へ：「老後の不安」「30年後の地球環境が不安だ」

\* 過去へ：「鍵をかけたか不安」（かけていないと、物騒だという将来への不安）

### (5) 状況との連関

\* 知らない、能力不足・自分のあり方への危惧、自信のなさ

\* 将来の不透明さ、insecure（分からない）

### (6) 実存的不安

\* 「無への恐怖～不安」 典型的には「死への不安」

\* 存在・無、自由

漠然とした不安＝実存的不安

### (7) 「不安」の解消／不解消

\* 対象と状況への明瞭化は解消につながる

心理療法

\* 根源的な不安と向き合う

哲学

キルケゴール『不安の概念』（1844）

不安とは人間の根源的な自由が体験するめまいである

ハイデガー『存在と時間』（1927）

根本情動性

サルトル『存在と無』（1943）

「人間は自由の刑に処せられている」

## 【2】西洋古代哲学における不安

### (1) 古代末期

\* どの時代にも「不安」はある

戦争、疫病、病気、政争

\* 古典期の哲学（ソクラテス、プラトン、アリストテレス）

やや違う：「魂を配慮せよ」、よく生きる、ポリスの政治

\* ヘレニズム時代からローマ時代の特徴

政治（帝国、反乱）、宗教（オリエントからの多くの宗教、キリスト教）

\* マルクス・アウレリウス帝即位からコンスタンティヌス帝の改宗に至る期間：  
「物質的衰退が急降下をたどる一方、新しい宗教感情がつつつと沸きあがっていた時代」＝「不安の時代 Age of Anxiety」

（E. R. ドッズ『不安の時代にける異教とキリスト教』、井谷嘉男訳、日本基督教団出版局、1981年、17頁）

### (2) マルクス・アウレリウス『自省録』を読む

\* 哲人皇帝マルクス・アウレリウス：個人と書き物を通じてみる

\* 岩波文庫、神谷美恵子訳、1956年：神谷美恵子 1914～1979年、精神科医

「マルクス・アントニヌスは、生涯を通じて哲学に没頭した人物であり、その一生の清浄さという点で、すべての元首たちに勝っていた。」（ユリウス・カピトリヌス「哲学者マルクス・アントニヌスの生涯」、アエリウス・スパルティアヌス『ローマ皇帝群像1』、南川高志訳、京都大学学術出版会、西洋古典叢書、2004年、134頁）

「皮肉なことに、皇帝になりたくなかったマルクスは、これから述べるように皇帝としての義務のために、それまでの皇帝たちが誰も経験しなかった内外の多事多端に追われて、ほとんど哲学の中で憩う余裕を持ちえなかったのである。」

（南川高志『ローマ五賢帝、「輝ける世紀」の虚像と実像』、講談社学術文庫、2014年、190頁）

### (3) マルクス・アウレリウス・アントニヌス Marcus Aurelius Antoninus

- 121年4月26日 ローマで生まれる。スペインの大貴族に家系
- 145年 アントニヌスの娘ファウスティナと結婚
- 161年3月7日 アントニヌス・ピウス帝死去、帝位。義弟ルキウスが共治帝
- 162～166年 パルティアとの戦争
- 167年 ランゴバルディ族とオビイ族が帝国領に侵入、マルコマンニ戦争始まる
- 169年 ルキウス病死
- 175年 アウイディウス・カッシウスがシリアで叛乱。マルクス東方行き、帰途にギリシア訪問
- 180年3月17日 ウィンドボナカシルミウムで死去。コンモドスが後を継ぐ

### (4) 経歴と態度

- \* 個人教師たちによる英才教育
- \* 相次ぐ北方諸民族の侵入により、戦乱にあけくれる。アウイディウス・カッシウスの叛乱
- \* 人材登用に工夫（能力ある者を元老院議員に任命）、息子コンモドスを後継者に指名
- \* 元老院の尊重、最良の人々との協議（ユリウス・カピトリヌス「哲学者マルクス・アントニヌスの生涯」、『ローマ皇帝群像1』、南川高志訳、184頁）
- \* 公共への奉仕、私欲の抑制、敵への寛容、軽い刑での処罰、公正な態度、財産に執着せず（父方の遺産を妹に与える）

### (5) 『自省録』という著作

- \* 「ta eis heautou」という標題：「自分へのこと」「自分に向かう」 内省
- \* 公開を意図していない？ 私的なメモ  
ゲルマン人との戦闘の現場、おそらく宿営地で執筆
- \* ストア派の哲学（後期ストア派：エピクテトスら）  
自分のもの／自分のでないもの  
自然・宇宙との一致
- \* マルクスが自身に向けて命令する：それを読む読者も、理性が自身に命じる  
訓練：予防接種：内的変革を伴う
- \* 上からの視点（宇宙論・永遠）：だが、内在主義（超越ではない）
- \* 「精神の訓練（Exercitia spiritualia）」としての哲学

## (6) 自省のポイント

### 【1】注意を向ける

- \* 常に精神を集中して注意を怠らない。人生の原則が「手元に」あるようにする
  - \* 現在の瞬間への集中：過去と未来（私たち次第ではない）に関わる情念からの解放；それを人生に当てはめる
- \* 永遠の時間と一瞬
- \* 宇宙的意識：各瞬間の無限の価値への注目 → 自身の個性の変容

### 【2】記憶する、訓練

- \* 想像・心理的技術、レトリック手法を思考の訓練に用いる：「目の前に」描いてみる；「銘記せよ！」
- \* 事前に悪を想定する：貧困、災害、死などは悪ではない
- \* 説得的な言論をくり返すことで、恐れや不安や悲しみを取り除く
- \* 一日の始めに、その日のことを思考、夜には一日の出来事・失敗を反省  
「早朝に自分自身に言い聞かせるのだ。」「夜明け方に、起き上がるのが嫌なときには、手元に用意せよ」
- \* 瞑想で内的な言論をコントロール：自身に出来ること／出来ないこと分別
- \* 世界の見方・現れ方の変容、内的心情、外的振舞いの根本的な変容

### 【3】知的に訓練する

- \* 訓練、記憶の訓練の栄養：読書、聴講、研究、探求  
「格言」を読む、哲学著作の読解、教師の指導下
- \* 研究はその指導を実践するもの：ストア派の哲学：論理学・自然学・倫理学

### 【4】自己鍛錬、義務の完了

- \* 実践訓練と習慣化：善悪無記のものへの無関心
- \* 意識的に、自由に生きる

## グループワークの課題

配布資料にある8つの断章のなかから2～3つほどを選んで、音読して味わう

- ① その言葉を理解しよう（疑問の点は尋ねる）
- ② 不安に対して、どんな態度をとっているか、感想を述べあう
- ③ 現代の私たちは何を学べるか、議論しよう

TAがついているグループは意見をまとめて報告  
それ以外のグループはまとめ役が、メモを残して提出



## 【参考文献】

### <邦訳>

神谷美恵子訳、創元社、1949年；岩波文庫、1956年、改版、2007年

鈴木照雄訳『世界人生論全集2』、筑摩書房、1963年；中央公論社『世界の名著：キケロ、エピクテトス、マルクス・アウレリウス』、1968年；講談社学術文庫、2006年

水地宗明訳、京都大学学術出版会「西洋古典叢書」、1998年

### <研究書>

水地宗明、注解マルクス・アウレリウス『自省録』、法律文化社、1990年

荻野弘之『書物誕生 マルクス・アウレリウス『自省録』精神の城塞』、岩波書店、2009年

### <伝記>

『ローマ皇帝群像1』、南川高志訳、京都大学学術出版会「西洋古典叢書」、2004年

南川高志『ローマ五賢帝、「輝ける世紀」の虚像と実像』、講談社学術文庫、2014年